

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 9 日現在

機関番号：33925

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2014～2016

課題番号：26770173

研究課題名(和文) スケールに基づく移動動詞のAspectと言語類型論の一般化に関する研究

研究課題名(英文) A Scalar Analysis of the Aspects of Motion Verbs and Their Typological Generalization

研究代表者

川原 功司 (Kawahara, Koji)

名古屋外国語大学・外国語学部・准教授

研究者番号：70582542

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,700,000円

研究成果の概要(和文)：Talmy (1985, 2000) は、移動を表す述語表現において動詞に様態が含まれるか、経路が含まれるかという類型論的一般化を提案した。この見解に従えば付随要素枠付け言語では様態が本動詞に含まれ、経路が接辞、不変化詞、付加部などの衛星として表現され、動詞枠付け言語では経路が本動詞に含まれ、様態が従属付加部として表現される。本研究では、述語が文を構成する基礎であり、1つの文につき述語が1つであるという Beavers et al. (2010) の想定に基づき、前者では付随要素に、後者では動詞にスケールが含まれていると仮定することで、この一般化に対する原理的な説明が可能かどうかを考察した。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this project is to provide a generalization for the typological survey of how languages encode directed motion events based on degree-based semantics. Talmy (1985, 2000) discusses the typological dichotomy of Satellite-framed languages and Verb-framed languages. In the former manner is encoded as a main verb and path must be a satellite, while in the latter path is encoded as a main verb and manner must be a subordinate adjunct. Following Beavers et al. (2010), I assume that the dichotomy is due to the fact that the verb is the root and single clause-lexical category that can encode either manner or path. Since the semantics of path can be characterized in terms of an abstract representation of measurement or scales, a variety of ways to encode reaching events can be described by scalar semantics.

研究分野：英語学

キーワード：様態 経路 スケール 移動動詞

1. 研究開始当初の背景

Talmy (1985, 2000) は移動を表す動詞に様態が含まれるか、経路が含まれるかという類型論的分析を提案している。これに従えば、英語は付随要素枠付け言語に、日本語は動詞枠付け言語に分類される。

- (1) a. 付随要素枠付け言語：様態が本動詞に含まれ、経路が接辞、不変化詞、付加部などの衛星として表現される (英語、ロシア語、ドイツ語など)。
- b. 動詞枠付け言語：経路が本動詞に含まれ、様態が従属付加部として表現される (日本語、スペイン語、フランス語、トルコ語、ヘブライ語など)。

本研究では、述語が文を構成する基礎となっており、1つの文につき述語が1つであり、付随要素枠付け言語では付随要素に、動詞枠付け言語では動詞に結果を示す要素が含まれるという Beavers et al. (2010) の想定に基づき、結果を表す意味がスケールを用いて記述できると仮定することで、なぜこの言語類型論的一般化が成立しているように見えるかという問題について、より原理的な観点から問題を捉えなおすことを試みた。また、動詞枠付け言語においては、動詞にスケールが内在されているということから、一部の動詞句、特に程度到達動詞におけるアスペクト特性がどのようになっているのかということについても考察した。

2. 研究の目的

英語のような付随要素枠付け言語では、移動様態動詞に到達点を示す語句を直接結びつけることができるが、日本語のような動詞枠付け言語では、「行く」のような移動到達・方向などを示す動詞が必要とされる。

- (2) a. *ジョンが店に走った。
- b. ジョンが走って店に行った。
- c. ジョンが店に走って行った。
- d. John ran to the shop.

移動到達を表現する源泉がどこにあるかという問題設定を立てれば、以下の4つの可能性がある。ただし、(3d) では到達要素がどこにも含まれないことになるので、移動到達の意味がどのように表現されるかが問題となる。可能性の一つは語用論・文脈の情報となる。

- (3) a. 動詞そのものに含まれる (動詞枠付け言語)
- b. 付随要素に含まれる (付随要素枠付け言語)
- c. 動詞にも付随要素にも含まれる。この場合、どちらの意味が優先されるのか、

両者で齟齬はないかといった問題についてでも考える必要が出てくる。

- d. 動詞にも付随要素にも含まれない。

移動到達を示す意味がどこに含まれるのかという問題を考察することによって、個別言語が移動到達という現象をどのように具現化するかという問題を明示的な形で記述できるようにするというのが本研究の目的である。

3. 研究の方法

理論的な方向付けとして、以下の方法を採用した。まず、動詞枠付け言語では「行く」のような移動到達を表す動詞がスケールを内在化しており、それが度量を提供する計量関数であるとする分析。それに対して、付随要素枠付け言語では付随要素、具体的には英語の場所到達を示す前置詞である to などにスケールが含まれているとする分析。この2つの分析方法を採用することによって、過去に分析されていた言語データ (Slater, 2005; Binnick, 1979; Özçaliskan, 2004; Zubizarreta and Oh, 2007; Matsumoto, 1996; 2003) を再評価した。それとは別に日本語と英語のデータ確認を個別に行った。また、勤務校のネイティブスピーカーを活用し、フランス語、ロシア語のデータについても適宜、参照した。また、European Summer School in Linguistic Typology 2016 を活用し、ドイツ語、スウェーデン語、ノルウェー語、オランダ語やアボリジニー諸語のデータについても適宜、ネイティブスピーカーの内観に基づいたデータなどを収集した。

経験的な方向付けとして、到達点を表す語句が移動到達にどのような影響があるかについても考察した。以下に示すようにトルコ語のデータとして、Tatevosov (2012) が興味深い事実を指摘している。(4) では、行為者が到達点に達した場合、完結的なアスペクトを表し、到達点に達していない場合、非完結的なアスペクトが表される。

- (4) a. kerim şqolba {eki minut-xa,
Kerim school-DAT two min-DAT
eki minut} cap-xan-di.
two min run-PFCT-3SG
“Kerim ran to the school {in two minutes, for two minutes}.”
- b. samalot muskwa-na {ike sexet
plane Moscow-DAT two hour
xuşşance, ike sexet} veş^j-r-e.
within two hour fly-PAST-3SG
“{The plane flew to Moscow in two hours., The plane was in flight to Moscow for two hours.}”

şqolba と muskwa-na という2つの場所を表す語句があるが、これらは曖昧な解釈を許し、到達点を

表すこともあれば、表さないこともある。つまり、付随要素枠付け言語が到達点を示す語句と結びつけられるという一般化があるが、到達点を表すと考えられていた付随要素はそれ自体の固有の性質として、常に到達点を示しているわけではない可能性がある。つまり、曖昧さを許容する可能性があり、(3d)の可能性を考慮する必要が出てくるわけである。スケールを用いた意味論は、形容詞の曖昧性の分析などに活用されており、曖昧性があるのであれば、移動表現の分析にも格好の方法論となりうる。

4. 研究成果

付随要素枠付け言語における到達を表すとされる場所句が内在的に到達を示すわけではないという観点から、関連文献を探りなおしてみたところ、異なる観点からの観察であるが、エベンキ語では移動様態動詞に位格の場所句がつく場合には到達の意味が示され、向格の場所句がつく場合には到達の意味が随意的であるということが指摘されていることがわかった。関連する例は(5)のようなものである (Grenoble, 2014)。

- (5) a. Asi: togo-la: murdurə-rə-n.
woman fire-LOC lean-AOR-3SG
“The woman leaned into the fire.”
b. Asi: togo-tki murdurə-rə-n.
woman fire-ALL lean-AOR-3SG
“The woman leaned towards the fire.”

同種の現象はアイヌ語でも観察される。これも、移動動詞の分析という観点ではないが、位格と向格で移動到達に対してエベンキ語と同じことが以下の例でも言える (Bugueva, 2012)。

- (6) a. kuca or ta arpa-an une
cabin place LOC go-SG-NID. S that
inaw-roski-an
inaw-put. up-PL-IND. S
“I went to a cabin and put my inaw up.”
b. kuca or un arpa-an kunak
cabin place ALL go-SG-IND. S that
a-θ-ramu kusu
IND-A. 3. 0-think so
“I decided to go to a cabin.”

位格が義務的に移動到達を示し、向格では移動到達が随意的であるという観察は、英語における to と towards の差と同種のものであり (Jackendoff, 1990)、その意味では場所格の形態素が豊富な言語で、到達の有無を形態的に区別することがあるということは自然な帰結のようにも思える。すなわち、付随要素枠付け言語と呼ばれてきたタイプの言語では、移動到達の意味が必ずしも顕在化され

ていなくてもよく、Talmy による一般化は移動到達の意味が動詞句の一部として具現化されるか (動詞枠付け言語)、否か (付随要素枠付け言語) という形で捉えなおす方が妥当性の高い分析になるのではないかというのが、本研究による一時的な結論である。また、位格と向格、時にはまとめて場所格として移動到達の意味に曖昧性が生じるという事実は、スケールを用いた意味論を使用することで明示的に記述することができ、その意味でも本研究は一定の成果を収めることができたと考えられる。

副次的な産物として、移動到達は完結的なアスペクトを含意するものであるが、程度到達動詞の分析に関しても一定の成果を収めることができた。英語では、段階的形容詞由来の程度到達動詞は完結的・非完結的の両方の解釈が可能であるが、日本語では「-まる」という形態素を使用して作られた形容詞由来の程度到達動詞は基本的に完結的な解釈が観察される。

- (7) a. The engine warmed {for, in} ten minutes.
b. エンジンが {??10 分間, 10 分で} 暖まった。

暖かいという形容詞は開かれたスケールを基準にした段階的形容詞であり、その意味では基準点が内在的に定まっておらず、非完結的な解釈が許されて然るべきだが、実際にはそうではない。つまり、スケール構造に関わらず、基準点は動詞句で慣用的に定められているわけである。この種の、程度到達動詞においてもあるイベントが完結的であると解釈されるのは、動詞枠付け言語の特性から導き出される特性である可能性があるということも、本研究を通して見えてきた成果である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 3 件)

① Kawahara, Koji. To appear. Non-neutrality and Setting of Standards in Degree of Change. *Linguistica Brunensia*. 掲載確定 (査読あり)

② Kawahara, Koji. To appear. Absolute Implications in Children's Understanding of Gradable Expressions. *Language Acquisition and Development*, Cambridge Scholar's Publishing. 掲載確定 (査読あり)

③ Kawahara, Koji. To appear. Manner and Path in the Motion Events of Altaic. MIT

Working Papers in Linguistics. 掲載確定
(要旨査読あり)

[学会発表] (計 5 件)

① Kawahara, Koji. 2016. Non-neutrality and Setting of Standards in Degree of Change. The 9th Conference on Syntax, Phonology and Language Analysis. 2016年9月16日, Masaryak University.

② Kawahara, Koji. 2015. Absolute Implications in Children's Understanding of Gradable Expressions. Generative Approaches to Language Acquisition 12. 2015年9月11日, University of Nantes.

③ Kawahara, Koji. 2015. Manner and Path in the Motion Events of Altaic. Workshop on Altaic Formal Linguistics 11. 2015年6月5日, University of York.

④ Kawahara, Koji. 2014. A Scalar Analysis of Motion Events. Linguistics Association of Great Britain Annual Meeting. 2014年9月4日, The Queens College, University of Oxford.

⑤ Kawahara, Koji. 2014. Aspects of Motion Events from a Typological Perspective, 11th International Conference on Actionality, Tense, Aspect, Modality/Evidentiality (Chronos 11). 2014年6月16日, Scuola Normale Superiore.

[図書] (計 件)

[産業財産権]

○出願状況 (計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況 (計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

[その他]

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

川原 功司 (KAWAHARA KOJI)

名古屋外国語大学・外国語学部・英米語学
科・准教授

研究者番号：70582542

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：

(4) 研究協力者

()